

## 日本語受動文の学習過程に於ける母国語

—中国語の影響について—

馮 富 榮

### I. 問題と目的

本研究を進めようとする動機として、四つの問題点があげられる。

1) 日本語教育における問題点である。最近日本語教育研究がさかんに行われている。日本語教授法の開発に力を入れた研究もあれば、教材の改善を目指す研究もある。ともあれ、その研究の多数はいかにして日本語を教授すべきかというところに視点をおいている。しかし、学習の主体は学習者である。教材、教授法を論ずる前に、まず学習者がいかにして学習しているかを検討することが大事だと思われる。それが分かればはじめて適切な教材、教授法が生まれるものである。ゆえに、学習方略の検討が必要である。

2) 心理学研究における問題点である。日本人の英語学習における母国語、即ち日本語の影響を検討した研究はいくつかあげられる。しかし、第二言語としての日本語学習における母国語の影響について、詳しく検討した心理学研究は少ないと言える。

3) 比較研究における問題点である。比較研究は、両言語の相異を明らかにすることによって学習上の問題点を見出すことができるという考えに基づいて行われるものである。しかし、言語の相異と学習の困難点とは別々の概念である。第二言語の教育実践に適切な示唆を与えようとするならば、両言語の相異を明らかにするだけでは、足りないのである。言語の相異を明らかにし、さらにそれが学習上の問題点となるか否かを検討することも必要である。いわば比較研究と誤用研究の連携が大切である。

4) 誤用研究における問題点である。日本語学習に関する誤用研究を概観してみると、副詞のエラーか、用語の活用のエラーかのような表面的な分類が多いことはわかる。系統性をなすエラーは何か、学習者が国別に普遍的に持っているエラーは何か、また学習者にとって容易に克服できないエラーは何かのような、質的な分類をした研究は少ないと言える。

本研究は、主として、中国人の日本語受動文の学習過程における母国語、即ち中国語の影響について検討することを目的としている。それと同時に、上述した四つの問題点も本研究によって検討してみる。

### II. 調査 I

質問紙1は、受け身マーカー（受動文に用いる助詞「に」「から」「で」「によって」を指す）の撰択部分と受動文の自然さを判断する部分からなっている。前者は複数撰択は可であるが、後者はとても自然からとても不自然までの5段階の撰択法をとった。被験者1は、130人の日本人を統制群とした。実験群としての中国人は三つのグループに分けられた。グループ1は平均で11年間の日本語学習歴を持つ人達で、20名である。グループ2とは中国での日本語専攻の大学3年生で、30名である。グループ3は日本での日本語学校で1年間以上日本語を学習した就学生で21名である。調査Iの結果に基づいて三つの仮説を検討した。

まず、受け身マーカーの学習におけるエラーは学習の年数が経つにつれて少なくなるが、文の自然さを判断するときのエラーは学習の年数と共に減少しないという仮説一は、結果によって裏づけられた。チューキーによる多重比較を行なった結果、前者では三つのグループの間に差が見られたのに対し、後者では三つのグループ間に差が見られなかった。

次に、文の自然さを判断するとき、両言語の共通の部分においては中国人は日本人と同じような評定値をつけるが、相異の部分においては日本人と反対の評定値をつけるという仮説二を検討するために、中国人と日本人の相関をとってみた。その結果、三つのグループとも、共通の部分で日本人と正の相関を出したのに対し、相異のところで負の相関を出した。ゆえに、仮説二も検証された。

最後に、共通の部分と相異の部分のどちらで、中国人がエラーを多く出すかを検討したところ、共通より相異のところにエラーが有意に多いことは分かった。ゆえに、両言語の共通のところより相異のところで、中国人がエラーを多く生じるという仮説三も支持された。

### III. 調査 II

質問紙2は、質問紙1の日本語受動文の自然さを判断する部分を中国語に訳して作成されたものである。被験者2は、100人の中国人の留学生まで、それをグループ4にした。回答の方法は調査Iと同じで、5段階の撰択法をとった。

調査Ⅱの目的は、日本語質問紙への中国人の評定値は、日本人のそれに近いのか、それとも中国人の同じ内容の中国語への評定値に近いのかを検討することにある。そこから、日本語受動文の自然さを判断するときの中国人のよりどころは何かを見極める。

そこで、中国人の日本語への評定値は、日本人のそれよりむしろ中国人の中国語への評定値に近いという仮説を立てた。この仮説四を検討するために、質問紙2を四つの内容にまとめた。X1は両言語とも自然であるような例である。X2は日本語は不自然であるが、その直訳の中国語は自然であるような部分である。X3は中国語は不自然であるが、その直訳の日本語は自然であるような部分である。X4は両言語とも不自然であるような部分である。

この四つのところにおける五つのグループ（調査Ⅰの被験者、日本人、グループ1、グループ2、グループ3と調査Ⅱの被験者グループ4）の評定値を比較した。その結果、X1とX4のところは、五つのグループの間にあまり差がなかったが、X2とX3のところは、グループ1、グループ2とグループ3の評定値は、日本人よりむしろ中国人グループ4の評定値に近いことが確認された。ゆえに、仮説四もおおむね検証された。

#### IV. 総合的考察

仮説一の検証によって、受け身マーカーの学習におけるエラーは発達のなもので、受動文の自然さを判断するときのエラーは発達のなものでないことは、はっきりした。つまり、後者は中国人の学習者にとって容易に克服できないことが確認され、そこに「化石化」があることは分かった。そして、「化石化」の起こる原因が母国語の干渉によるものだと解釈した。このようにして、本研究は、エラーの原因について探ぐり、さらに発達のなものであるかどうか、母国語の干渉によるものかどうかというように、エラーの質的な分類を試みた。

もし、母国語に干渉的な影響があるなら、促進的な影響もあると考えられる。仮説二のところでもこれについて検討した。その結果、前者は両言語の相異のところに、後者は共通のところにあることが見いだされた。とくに中国人のグループ3は、日本に来てから日本語の受動文を学習しはじめた人達で、日本人の教師から日本語の受動文を教わっていた。しかし、それにもかかわらず両言語の相異のところに日本人の評定値と負の相関が得られた。これは、学習者は必ずしも教授されたとおりに学習を進めるとはかぎらず、学習者が能動的に用いている学

習方略には、母国語の知識のある可能性が示唆された。

もし、仮説二のところで示唆されたように、両言語の相異のところに母国語による干渉的な影響があるならば、相異のところは、中国人がエラーを多く出すことは考えられる。仮説三は、これについて考察した。その結果、予想したとおりに三つのグループとも、共通より相異のところにエラーが多かった。このようにして、本研究は、この研究の中でまとめた中国語と日本語の受動文の相異点は中国人の日本語受動文の学習における問題点となることを確かめ、比較研究と誤用研究の連携も試みた。

もし、文の自然さを判断するときのエラーが学習の年数とともに減少しなかったのも、両言語の相異のところに日本人と反対の評定値をつけたのも、相異のところで中国人がエラーを多く出したのも、すべて母国語、即ち中国語の影響によるものならば、中国人の日本語への評定値は、日本人のそれよりむしろ中国人の中国語への評定値に近いことも考えられる。仮説四のところでもこれについて検討した。チューキーによる多重比較を行なった結果、この仮説はおおむね検証された。このようにして、中国人は日本語の受動文の自然さを判断するとき、日本語の構文ルールよりむしろ自らの中国語の構文ルールに従うことが本研究によって示唆され、中国人の日本語受動文の学習における母国語——中国語の影響を実証した。

#### V. 今後の課題

この研究に関する今後の課題として、まず二つのことが考えられる。

- 1) 本研究では、中国語と日本語の受動文に関して、七つの相異点をまとめた。しかし、どのような相異点に、中国語による干渉的な影響がより強いのかについては、検証されなかった。これを今後の課題とする。
- 2) この研究が日本語教育実践にどれほど寄与できるかに関しても、本研究では検討されなかった。つまり、教授活動の中に中国語と日本語の受動文の相異を配慮することによって、どれだけ中国人の日本語受動文の学習を促進できるかについて検討するのも、今後の課題である。

#### 引用文献

- 井上正明 1971 英語名詞の内包的意味に関する因子分析的研究 教育心理学研究 第19巻第1号  
郭志江 1989 中国人に対する日本語教育における漢字教育の諸問題 講座 日本語教育 第24分冊